

子どもと向き合う児童文化研究会
自分のためになるボランティアとは？

誰でも一度は歌ったことのある童謡「大きな古時計」。みなさんはその続きを想像したことはありませんか？ 時計が止まってしまったその後の物語。そんなストーリーを子どもたちのために紡ぎ出したのが、帝京大学児童文化研究会「Steps」の学生たちです。彼らが行っているのは、人形劇や紙芝居などの公演や、子どもと関わる地域のボランティア活動で、大学近くの児童館や小学校を中心に定期的に実施しています。公演の台本はすべてオリジナル。みんなで持ち寄ったアイデアを詰め込み、ストーリーを作る。労力のかかる作業ですが、あえて時間と手間を掛けて物語に深みを出します。台本が完成した後は、休み時間や放課後に、毎日コツコツと練習をしているそう。その原動力は何でしょう？ 紙芝居を担当する文学部教育学科3年の大山智さんはこう言います。「ボランティアサークルというカテゴリで活動していますが、最近、実感しているのは、ボランティアは、している、ではなく、させてもらっている、ということ。結果的に、すべて自分のためになって返ってくる、強く感じます」。人形劇チームの相田美保さんは、「私は保育士を目指している

ので、子育ての一番大事な時期を親御さんと一緒に考えていきたい。子どもたちと直接関われる機会はすごく勉強になります」と話してくれました。そして迎えた公演当日。人形劇の主人公がサメに襲われるシーンでは、怖くて泣いてしまう子どももいます。でもそれは、ストーリーに感情移入してくれている証拠。心が動かされる体験が成長につながるから一杯演じます。子どもたちに馴染みのある「大きな古時計」を軸にした紙芝居は、冒険と友情の物語。おじいさんが天国に旅立ち、止まってしまった古時計。そこに住んでいたネズミくんが、仲間とともに喧嘩しながらも協力して、もう一度時計を動かそうとするストーリーです。公演終わりの挨拶では、人形を抱きついでくる子どもがいたり、「ネズミくんだ！」と歓声が上がったり……。そんな反応にちよつとうるつときている学生の姿もありました。Stepは活動37年目という歴史のある研究会。児童館へ行くと「去年も来てくれたよね」と言われることがあります。子どもたちの記憶に残る時間を作るため、学生たちも一生懸命です。いじめや虐待の問題など、いま教育の現場は厳しいと言われていきます。だからこそ、子どもたちと心から向き合いたい。学生たちはそう考えています。

feel TEIKYO ft
あなたにつながる帝京大学 撮影・清水奈緒

